

会員のページ

★忍路臨海実験所が開設 100 周年

1908 (明治 41) 年設立、日本で 2 番目に長い歴史をもつ忍路臨海実験所 (北海道大学北方生物圏フィールド科学センター附属、小樽市) が、1 月 9 日に 100 周年を迎えました。これを祝う記念式典が昨年 10 月 20 日に忍路で開催され、関係者 50 人余りが出席しました。式典には、1944 年から 58 年間管理人として実験所に勤務し、フィールドで数多の生物学者の研究を支えた信太和郎氏しんたかずろうが招かれ、感謝状の贈呈が行われました。その際、



信太氏から北大へ寄贈された油絵 (写真、小樽市出身の油彩画家川雅吉画伯かわまさよしの作) は、鏡のように波静かな忍路湾の眺望が描かれ、傘寿を迎えなお実験所を見守り続ける氏の忍路への愛が伝わってきそうな作品です。

(北山太樹)

★出雲大社の素鷲社の海藻 (前号本欄の質問を受けて)

私は民族藻類学の「駆け出し」というより「歩き出し」で、木村光子さんみづがきのご質問は難問です。出雲大社には数回お参りし、本殿周囲の瑞垣みづがきの外も何度か歩きましたが、素鷲社などの撰社で、ご質問の様な海藻を見たことはありません。念のため、出雲大社に問い合わせましたが、本殿でも撰社でも種々の海藻を置く神事はないそうです。

ただ、木村さんも仰る「巖藻」や「出藻」語源説のある出雲は、朝鮮半島東部新羅の余った土地を引き寄せたとされています (出雲國風土記, 733)。古代朝鮮では高句麗・百済・新羅・加羅 (任那) が争っていましたが、海藻と海藻食文化が特に豊かな新羅からは多くの難民が来た様です。素鷲社祭神すさのおの素鷲鳴尊は、大国主尊の父または数代前の祖先とされます (日本書紀, 720)。父の伊弉諾尊いざなぎから海を治めよと言われたのに治めず、乱暴で高天原を追われ、息子の五十猛尊いそたけと新羅に降りたが気に入らず、船で出雲に来ました (古事記, 712; 日本書紀, 720)。つまり、彼は新羅系の豪族で、後に出雲の国造りをしたと考えられます。

ところで、出雲の佐太神社さだなどでは、神道での 50 日の忌明け後、ホンダワラ属の海藻と海水を神社に持って来て、お祓いをして身を浄め、海藻を賽銭箱の隅、欄干、石段の片隅や潮草架けに置く習慣があります (詳しくは本号 35-38 頁)。しかし、素鷲社における海藻は、ホンダワラ類の他に、緑藻、テングサもあり、注連縄も置いてあったというのですから、それは忌明け後のお祓いではなく、民間の人が素鷲鳴尊を尊んで、お祀りしたのだと思います。(濱田 仁)

★海藻押し葉はがきづくりコーナー (水産工学研究所)

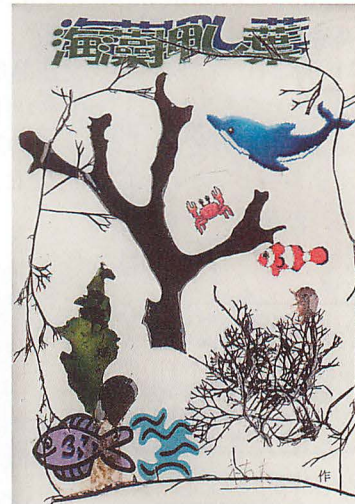
独立行政法人水産総合研究センター水産工学研究所では、毎年 10 月に研究所一般公開を行っています。平成 19 年度には 10 月 20 日 (土) 10 時~15 時に、「波と流れと生き物のふしぎ」をテーマに開催しました。会場では、「海の中で鳴くどうぶつクイズ…鳴き声を聞いて種類をあてよう!」、「顕微鏡観察…ふしぎなミクロの世界をのぞいてみよう!」、「漁船の模型展示…実験に使用する模型の船を見てみよう!」、「タッチプール…磯の生き物にふれてみよう!」などと「海藻おしばがきづくり…海藻でハガキにアートしよう!」のコーナーを設けました。



海藻押し葉の参加者には、魚のキャラクターなどをレーザープリンタで印刷したはがきを配り、10 日ほど前の干潮時に千葉県銚子市犬吠崎君ヶ浜に打ちあがった海藻を使って押し葉をつくっていただきました。カニ、カイ、ハリセンボン、イルカなどのイラストを、自由に切り取って海藻押し葉の周辺に配置してもらえよう OHP シートに印刷したものを用意し、現実には

あり得ないような生物の配置となっても構わず創作してもらった結果、数多くの傑作が生まれました (写真)。参加した作者約 300 人の内訳は子供がほとんどでしたが、1 割ほどが大人でした。今年度は特に参加者が多く、作業スペースが確保できずにあきらめる人がありました。この点を反省し、平成 20 年度は規模の拡大を考えています。

(桑原久実・寺脇利信)



★海藻標本のご寄贈に感謝 (科博, TNS)

三谷 進先生 (香川県高松市) より、香川県産 (一部沖縄県産) 海藻の押し葉標本 571 点の寄贈を受けました。瀬戸内海固有種の紅藻セトウチフジマツモ *Neorhodomela enomotoi* などを含む貴重なコレクションをいただきまして、この場をお借りしてお礼申し上げます。

国立科学博物館大型藻類標本室 (TNS, つくば市) では、海藻標本の寄贈を歓迎しております。詳細は 55 巻 2 号の本欄をご覧ください。(北山太樹)